
アウト！

紫乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アウト！

【Nコード】

N1447Z

【作者名】

紫乃

【あらすじ】

病院玄関ですべて転んだ先は異世界でした。28歳彼氏なし。ライトノベルは好きだけど、まさか自分がトリップするなんて…、あの、明日も勤務なんですけど帰れますか？

転んだ先

「ひゃあぎゃ！」

べたん

多分そんな音がしたと思う。

なんとも情けない声を出してしまったことに恥ずかしくなり、急いで立ち上がった。

「……あれ？」

あたりは真っ暗だった。

「……なに？」

何度も瞬きして、目をこする。恐る恐る目を開けてみれば、外だということとは分かった。

暑いくらいの風、瞬く星、虫の声、周りは背の高い草、足元は多分土。

「……どこよ」

とりあえず携帯ライトを点けて辺りを見回してみるが草のせいでも見えない。

先ほどまで病院にいたはず、夜勤明けで帰るところだったから朝だったはず、季節は冬だったはず。

転ぶ前の状況を思い出して頭を抱える。

「……トリップってやつ？」

ライトノベル好きで、トリップものもよく読んでた。

認めたくないが自分は違うところに来てしまったらしい。

せめて日本のどこかがいいなあ、お金使えるかな。家までどうやって帰ろう……

こういう展開になった主人公たちはどうやって帰ったんだっけ……

大きいため息をついて、座れそうなところを探して草をかき分けた。

「あー…疲れた」

夜勤明けに太陽の光は厳しい。

しよぼしよぼする目をこすって、首を回せばゴキツと音がした。
今日は帰ったら寝る。

ずっと寝る。

だって疲れたんだもん。

あ、でも買い物行かなきゃ…

重い足取りで職員玄関に向かう。

玄関を出れば雪が降っているんだろうと思うと、より憂鬱になる。

「…つつ、わあ！」

廊下の水滴に靴が滑ってバランスを崩す。

あわてて傍の壁に手をついた。

はず…だっただけど。

なんか、すり抜けた…

眠気なんて一気にさめて、必死に草をかき分ける。

どれくらい進んだか分からないけど、少し小高い丘を登ったようだ。
丘の上にあった大木に寄りかかって座り込めば、もう足に力が入ら
なかった。

「…ほんと、どこよ、ここ」

つぶやく声も弱弱しく感じてしまう。

「…月が、ない」

見上げる空には月がなかった。

いや、日本でも月の見えない夜もあるしね！

携帯のライトを消してコートを脱いで足にかける。

帰れるのかな、明日も勤務なんだけどな…

「疲れたあ…」

少しだけ休むつもりで目を閉じた。

不思議と怖いとか、身の危険とか考えていなかった。

普段なら外で寝るなんて考えられないのに。
薄れていく意識の中で、ネコの目のような金色の光を見た気がした。

ご飯は大切です

どこまでも続く草原

うん、日本にもあるね、北海道とか。

行ったことないけど。

友達が旅行に行った時のお土産おいしかった。

大きな湖

ほら、琵琶湖とかあるじゃない！

なんか色が黄色っぽいけど。

…硫黄とか！

…噴火する山

えーと。

今噴火してる山…外国にあったな。

アニメとかで見るようなおっきな噴火だなあ。

……空飛ぶ竜

えーと。

模型。

実は新型の戦闘機。

さすがに現実逃避が難しくなってきた…

明るくなって、私が見たのは現代日本の光景ではありませんでした…

思わず現実逃避に走った自分、悪くない。

気絶という名の二度寝に突入しそうになったんですけど、私の目の前、伸ばした足の上に鎮座する物体Xが…

「ぎゃん!!」

私のデコに激突して目を覚まさせてくださいました…

その物体X。

なんて表現すればいいのか。

大きさはバスケットのボール。

形は真ん丸。

色は真っ黒。

持てばあたたかくて、軽い。

…不明です。

「さて、どうしようかな」

物体のことはとりあえず放置することに決めて、これからのことを考えます。

現実を見ましょう…

「電波…」

携帯は圏外、当然ですね。

「食糧…」

鞆をあさっても、ペットボトルのお茶しか出てきません。

しょうがないよね、仕事だったんだもん。

夜勤に持って行ったおやつ残り、鞆に入れてくれば良かった。

じゃあ、帰る方法を考えながら、食糧さがしかな。

ぼーっとしてる間に時間は過ぎちゃうもの。

とりあえず動くか！

「よつこいしょー…」

ごろん

物体が足から転がり落ちた。

ころころころ

丘の下のほうに勢いをつけて転がっていきます。

あ、なんかちよつと罪悪感。

どうしよう、拾ってきたほうがいいかな。

どんどん転がって見えなくなりそうで、ちよつと慌てて走り出す。

「まってまって！」

ぼすん

そんな音を立てて、物体は岩にぶつかって止まった。

「あつぶな、見失うとこだっ…ぎゃん！」

抱き上げようとした私にまたぶつかってきましたよ、こいつ。

あれ、でもなんか。

「怒ってる？」

うん、雰囲気かね、拗ねた子供みたいな感じ。

ポーンポーンって跳ねてるんだけど、くるくる私の周りをまわってるの。

「ごめんね」

なんだかわいく思えてきて、笑ってしまった。

人の言葉がわかるのか、ピタリと止まったそれは私をじっとみていた。顔は無いけど、そう思った。

「ネコみたいねえ」

実家で飼ってたネコを思い出した。

機嫌を直したクロさん（仮名）は私をどこかに連れて行きたいらしい。どういう仕組みか、彼は私を引っ張って行きます。

「クロさんどこ行くの」

どんだん森の中に入っていくから不安になってくる。とっさに荷物

つかんできて良かった。

「こんなにゆつくり歩くの久しぶりだな」

そういえばこの頃は仕事ばかりで、ゆつくり散歩もできてなかった。

「仕事始まった時間・・・」

携帯は始業時間を示している。

「あー、遅刻。首だよきつと」

今日は担当の患者さんの検査があったな。不安がってたから一緒に行ってあげたかったな。

昨日手術だった患者さんの経過は大丈夫かなあ。

「早く帰らないと」

クロさんが返事してくれるわけじゃないから、ずっと独り言。だんだん寂しくなってきた。

「？、クロさん？」

彼の引つ張る力が弱まった。

ぼーっとして気づかなかったけど、目の前に大きな木があった。リンゴっぽい木の実が生ってる大きな木。

「クロさん、これ食べれるの」
ポンポン。

食べれるらしい。

なんてお利口さん。

慣れてくると可愛いな。

意外においしかったです。

リンゴの味じゃなかったけど、カスタードクリームみたいなバニラの匂いがしました。

あ、クロさんも食べました。吸い込まれてなくなりました。ほんとどうなってるのかな、これ・・・。

クロさんは私がリングもどきを鞆に詰めたのをみとどけると、また私を引っ張りだしました。

今度はどこに連れてつてくれるのか、よく分かりません。

でも、不思議なことに怖いとか、警戒心とか全く感じないのですよ。ふつつあるでしょ。

でも、この変な物体に関して私は全く警戒してないんです、無条件に信頼してるみたいなの。

「わかんないなあ」

クロさんが私を見上げた気がしました。

こんな訳が分からない世界で、変なものを信用して良いのかな。ま、いいか。

だって他に頼るものないし。

クロさんなんでも知ってそうだし。

…それにしても、さっきからクロさん以外の生物？に全く出会わないのよね。

さつき丘から見た感じでは人外のものとか、怖いものとかいっぱい。そんなイメージがあつたのに。

森はどんどん深くなっていくし。

まさかこの向こうに私を食ってやろうとか考えてる魔物が居たりして。クロさんはそいつの手下だったり？

……ないな、そんなに高等な考えなさそう。

ってか、私がこっちに来た理由ってなんなのかな。

ほら、普通の小説とかでは、伝説の勇者様とか、世界を救ったりする巫女さんとか、あるじゃない。

でもねえ、全くそんなんじゃない感じ。

多分ぱっかり空いちやった穴かなんかに偶然にも落っこちちゃったんだろうね。

たまたま。

ああ、ついてない。

ねえ、クロさん、そろそろ疲れました。

アラサーの体力のなさ、見くびってはいけませんよ！

境界

「・・・クロサーン、どこ行ったのー」

迷子です。

クロさんが。

いえ、ごめんなさい、私です。

いや、迷子じゃないかも。

クロさんに安全に夜を過ごせそうなのって言って連れてこられたところ、たぶん最初の丘、だと思います。

んで、辺りも暗くなる頃かな、あ、火を起こさないといけないよね。

クロさん、燃やせそうな物ある？

って聴こうと思ったら、クロさんはもういませんでした・・・。

頼りすぎてきらわれたか。

単に自分の家に帰ったのか。

後者希望です。

言葉は無くても、この世界での友人第一号に嫌われるのは切ないです。

家族の元に返ったんだって信じて、自力で夜を越す準備をします。さて木の枝でも拾ってくるかね。

じゃん。テレッテレー

ライター

昨日禁煙宣言した友達から託された100円ライター

禁煙宣言ありがとう！昨日と同じコートでよかったー。

早速火をつけまして、リンゴもどきを炙って食べようかな。

わー、サバイバルだー。

みんなライター持ってトリップなんてしないよね。運がいいのか、悪いのか…

「え？」

私は今、大木の根元。

私の背には木の幹があります。

その幹がかすかに振動したように思った。背にあたる微かな揺れ。背を軽く押されたような衝撃。

「ええ？つぎやあ！」

木を中心に、私を通過して黒い霧のようなものが放出される。

「はわわわわ…」

私の表面をなぞっていく霧状のものをあわてて振り払うけど、どんどん増え始めて。

気付けば辺りは霧が立ち込めていた。

空を覆って霧はゆっくりと世界を夜に変えていく。

青空と夜空の境目が、地平線と交わったとき、辺りに光がなくなっていた。

空には星が瞬き、ビロードの闇が広がる。

「うわぁ…」

その光景をしばらくはじっと見つめていた。

青空に広がっていく闇がキレイで、地平線と交わった瞬間の空気の変貌。

世界の昼と夜の境目は幻想的な風景だった。

「この木から、出たよね…」

振り返れば、かすかに発光しているように見える大木がある。

この暗い中でこの木だけはっきりと見える。

そういえば昨日も、この木が見えたから近くまでこれたんだ。

クロさんが安全っていったこの木は一体何なのかな。

「・・・明日する事はー、寝るとこ何とかしよう。帰り方わかんないもの、せめて快適を求める」

コートをかけて横になる。

やっぱり今日も月は見えなかった。

昨日もお世話になった大木がうつすらと光ってるように見える。青白い光がぼわぼわ生まれて消えていく。幻想的な光景に見入ってしまった。昨日もこうだったっけ？忘れちゃったけど、綺麗だし、明るくて、いいや。

明日クロさん来るかな。

来てくれると良いな。

自分でつけた火がいつの間にか消えていても、気づかなかつたくらい、青い光に見入っていた。

セルの木の根元で木を見上げているヒト。

ヒトと呼ばれる形のもの。

遠目にしか見たことがなかった小さく、弱く、賢い種族。

夜である私が見るヒトは、家の中で明かりを点けて笑ったり怒ったり。

独りで過ごすものはいない。

だからだろうか、この世界に迷い込んできたヒトを気にかけてしま
うのは。

話す者のいない、寂しさを知っているから。

声

ぼすっ

「ぐはっ!!」

腹に重い衝撃。

目覚めと同時に与えられた苦しみに、思い切り咳き込んだ。

体をひねって苦しむ私の横で軽やかにポンポンと跳ねまわっている物体に殺意を抱く。

昨日の来てくれるかななんて言う乙女心は咳と一緒に体外に消え去った。

「なにすんじゃ、ごうるあ」

巻き舌できないけど、怒りを表現したかった。

ご機嫌に跳ねまわるクロさんを軽くはたいて転がしてやった。
気づけば辺りはすっかり昼間だった。

昨日の夜の始まりは本当に幻想的で、きつと夜の終わりも負けないくらい綺麗なんだろうって、楽しみにしてたのに、すっかり寝過ごしてしまっただようた。

「異世界生活2日目です」

独り言にもだいぶん慣れました。

この状態で元の世界に帰ったら、あまりの独り言の多さに引かれるんじゃないだろうか…

カルテ書きながら独り言？あ、いつものことだった。

いや、ついね、確認しながら…

周りにはスルーされます。

だっていつものことだから。

「時間のながれも同じなのかな。携帯も電源切れちゃったし、時間も定かじゃないし」

もう！

ちよっとイライラするのも仕方ないと思います。

だって、全然解決の方向が見えないんだもの。
ちよつとそのクロさん。

そんなに怖がらないでこっちにおいて
カムカム

私にはたかれてから様子をつかがっていたらしいクロさんは素直に
よつてきました。

なんて純粹。

「はい。つつかまえた」

がつしりと両手で捕まえて、ぎゅーつとしてみる。
やっぱりクロさんは温かくて、なんだか安心した。

「ねー。クロさん。…ココには私一人しか居ないんだよね」
クロさんが少し身じろいだ。

逃げる様子はなくて、腕の力を弱める。

ぽとん

腕から落つこちたクロさんが私を見上げる。

目の前がにじんでいた。

鼻の奥が痛かった。

…鼻水出てきた…

28にもなると人前ではなかなか泣けないもんなんです。

仕事で失敗したときも、振られた時も、悔しい時も、ぐっと我慢し
てた。

でも、ここには誰もいないし。

気を張つて必要はない。

いつも強いとか、しっかりしてるとか、それが周りの私への評価。
本体は全然そんなことないのに。

ただ、人前で泣けない意地っ張り。

一人で寂しいって思ったはずなのに、一人に安心して泣けてしまっ
た。

とめどなくあふれてくる涙を止められなかった。

「……お話がしたいよ、クロさん」

なっさけない途切れそうな声に、かすかに笑った。

うん、ぼくもおはなししたい。
だからもっとはなして。

自分のしゃくりあげる声に混じって声が聞こえた気がした。

やっと落ち着いたと思ったら、クロさんはただひたすらくるくるコロコロ転がっていた。

焦って慰めてくれているようにも感じて、嬉しくなった。
訳の分からない世界で唯一傍にいてくれる。

クロさんの存在がすごく大きくて、温かった。

「さ、ベッドと、家でも作るかー」

涙を流したからか、胸にたまっていた重りが少し軽くなったように感じた。

ポンポンと、後ろをついてくるクロさんを確認して必要そうな材料を考え始めた。

颯爽と歩く後姿。
不意に見せた雫。

ぼくのこえはまだとどかない

火山といえば…

はつきり言つて、だいぶ快適生活に近づきました。

丘の大木の近くに背の高い草を集めたベッドを作りました。

それだけじゃいつか降るかもしれない雨が心配だったから、森の奥深くで発見した巨大な葉っぱを摘んできて壁と屋根の代わりにしました。

後は木の枝とか蔦とかで補強して完成

とりあえず休憩スペースの確保ができたので、ここを拠点にいろいろ探りに行こうと思つてます。

自分凄い。自分を誉めるの。だって誰もいないから…。

あー、またヘコミ状態になるとこだった。

さて探検しよー、クロさん。

昨日の夜もクロさんはお帰りになって、昼になって帰ってきました。家族が居るなら一緒に連れて行ってくれても良いじゃない。言つてもダメだったけどね。

それにしても、ホントに何にも居ないの。

ちよつと拍子抜け。

「クロさん、他の動物つてこの辺居るの？」

問いかけてもお返事は相変わらずありません。

クロさんも癒しだけど、他にも居たつて良いと思つたの。

怖いのは遠慮します。ホラーとかダメなんで。

「お、湖だー。これつてあの丘から見えた湖かな。やっぱ黄色っぽい」

手を入れれば温泉並にあつたかつた。

あ、火山もあるしね、湖じゃなくて温泉なんだ。

そうとわかつたら無性に入りたくなくてきて、匂いが気になってきた。

こちらにきてから当然お風呂にはいつてないんだもの、温泉なんて見つけたら入りたくなるのはしょうがないよね。

ぽんぽん服を脱いでいく私をクロさんは止めもせず見ているらしい。誰もいないと思うから、行動がだんだん大胆になっていく。

素足の先を水面に浸けるだけでときどきした。

「クロさん？」

いきなり慌てたように忙しく動き始めたクロさんを不思議に思いつつも足を入れれば、あつという間に胸までお湯に津かった。相変わらずクロさんは何でかわたわたしてる。

じんわりと染み渡るように体の力が抜ける。

頭も洗ってしまおうと、勢いよく潜れば、するどい歯が目前にあった。

と確認したと同時に後ろにすごい力で引つ張られた。

「ん、ぎゃいやあ！！！！！」

宙を飛ぶ私を追って鋭い歯を持った何かがジャンプした。脚の先数センチ先にある脅威に体が固まる。

シャー！！

私を庇うように立ちはだかった大きな黒い壁にジャンプしてきた生物が跳ね返った。

バsshャーン・・・

「なななな、なに！？クロさん！クロさーん！！！」

目の前の壁に張り付く。

壁はゆっくりと小さくなって、私の腕におさまった。

「クロさん、あああああれ」

ザパザパと浅瀬で身動きが取れない巨大生物。

私くらいなら楽勝で丸呑みできそうな大きな口

「ひひひひひ！！！」

服と、クロさんを引つ掴んで逃走。

マッパ？

そんなの命のほうが大切よ！！

誰もいないんだからいいじゃない！

「はあ、はあ」

荒い息を落착かせて、抱えていたクロさんを落つことす。

ぽよんと可愛く跳ねたけど、気にしない。そんなことより怖かった。

「ひどいよ、クロさん。危ないなら言つてよー」

クロさんはじつとこつちを見ていた。

「…ごめん、助けてくれて、ありがとう」

今度から絶対クロさんに確認してから行動する、絶対！

私の反省が伝わったのか、クロさんは満足げにくるりと回った。

「ああ、でも温泉…お風呂…何とかして入りたい」

温泉の中の巨大生物に気を付けながら入る方法を考え始めた私をク

ロさんは呆れたように見ていた。

誰か…

温泉を泣く泣く諦めた私は、とりあえずお家に帰ってきました。

クロさんはいつの間にか居なくなっていて、丘に着いたとほぼ同時に夜が訪れた。

夜は真っ暗で月もなくて普通なら怖いと思うんだけど、昼間より安心するのは为什么呢。

やんわりと包まれて守られてるみたいに感じる。

夜はクロさんもおいなくてちよつとさみしくて、独り言が多くなります。

そして昼間あったことを鬱々と考えてしまいます。

あれは怖かった。

油断してたのもあるよね。

だってこれまでは何にも会わなかったんだもの。

「あれ？そういえばあの時クロさんおつきくなった？」

思い返して気づく。

大きさ自在？

いいえ、でも壁っぱかった。

形も自在？

……… 良いね！！

きつといるんな物に变身できるはずだ！！

明日聞いてみよう。

そんで、色々見せてもらえたら嬉しいな。

ネコっぽいイメージがあるから、小動物系とかもいいなあ。

「……… もしかして、クロさんって人間に变身できたりする？」

いやいや、高望みはいかんよ！

もしかしたら变身なんてできないかもしれないし。

でも…

「お話：したいな」

言語的コミュニケーションっす。

言葉には言葉で返してもらえたら嬉しい。

たとえ言葉が違ってても、頑張って覚えるから。

人の目を見て話すこと。

相手から言葉をもらうこと。

いつもなら嫌でも行っていて、時には面倒に思っていた他者との会話が懐かしい。

3日目にして限界も近いよ。

泣いたことで少し楽になったけど、やっぱり誰かの顔が見たいって思うよ。

なんならこの前セクハラしてきたおじいちゃんでも。

この前言いがかりつけてきたクレーマーのおばちゃんでも。

好きになれない職場の同僚、上司、生意気な後輩でも。

この前別れた元彼でも。

「……………だれでもいい」

誰かの傍に居たいな。

世界の果てに

「うおおおお?! クロさん! すてき!」

やってくれました。

変身。

この世界にもいるのか、私の考えがわかるのか、ネコさんになってくれました。

真っ黒のつやつやの毛並みに、青い瞳の美人さん

「かわいいかわいいかわいい」

撫で倒したくなる可愛らしさ。

「にゃーっていつて! 言えるかな? にゃー」

クロさんには私の言葉がわかってる。

だから希望を持った。

もしかしたら何かお話してくれないかなって。

でも、私を見つめるだけでクロさんは鳴いてもしゃべってもくれなかった。

がっかりって言ったら、ひどいよね。

だって勝手に期待したんだもん。

明らかにテンションの落ちた私の周りをクロさんが歩き回る。
なんか心配そうに。

《にゃ》

「ほ?」

《にゃー》

「ええ？」

《にゃー。あつてる？にゃー？》

「……あつてる」

《後は、なに喋る？》

声、ではなく。

体の芯に響くような、振動。

それは、心配そうに私を見上げるクロさんから聞こえてきた。

《やっと、通じたんだね。ぼく、ずっと話しかけてたんだよ》

「そ、そうなの？」

突然のことに、パニックですよ。

落ち着いているように見える？

うん、よく言われるけど、内心すごくテンパってるのよ。

ほら、すぐドキドキして胸が苦しい。

《ね、あなたはヒト、だよね》

ヒト、クロさんは私をヒトって言った。

それって…

「うん、ヒトだよ。……私のような姿の人は、近くにいるの」

ヒトを知ってる。

この世界に人がいる。

《ずっと遠くにいるよ。世界の中心、セルの木から、一番遠い光の地》

「世界の中心」

中心と聞いてあの大木を思い出した。

《闇が生まれて、闇が還る場所》

「……私は、ヒトの居るところに行ける？」

《…行きたいの？セルの木の傍は世界で一番安全で、あなたを傷つけるものを寄せ付けたりしない》

試すような目だ。

クロさんのキレイな青の目が細められる。

小さな体なのに、威圧感で背筋が伸びた。

知らず、唾を飲み込む。

「…行きたい。安全でも、クロさんが居てくれても、やっぱり私は元の世界に帰りたい。少しでも情報を得るためにも、行ってみたいよ」

クロさんはじっと私を見ている。

なんだか、少し非難されているような気がした。

《…わかった。ぼくが連れて行ってあげる》

「え！？ほんと？」

《嘘は言わないよ。ぼくらは嘘をつかない》

その言葉に安堵して大きなため息をついてしまった。
気が抜けたって言っていていいかも。
それくらい安心した。

《でもね、一つお願いがあるんだ》

クロさんの瞳はいたずらっ子のように輝いていた。

興味

一緒に連れて行くこと。

クロさんの出した条件は案外単純なことだった。
や、むしろ嬉しいっすー！！

だって何もわかんないし、心配だよ。

クロさんは改めてこの世界の説明をしてくれた。

光源の世界。ルスター。

太陽の光に満ちた祝福の世界。

ヒトが存在するのは世界の端。

光を崇め、闇を厭う。

セルの木から生まれた闇が世界を覆う頃、ヒトは人工の光をともす。

暗闇は魔の象徴。

「どうやって行くの？遠くなんだよね？」

《闇に乗っていくよ》

《ぼくはセルの木から生まれた闇の一部。ぼくの本体はセルの木の
中にある》

いや、私は？

クロさんは頷くと、しっぽを振って歩き出した。
めっさかわいい。

ネコ好きの血が騒ぐわー。

実家にいるにゃんこは元気かな。

違うことを考えてるうちにクロさんはあっという間に離れてしまっ

た。

「まって〜」

まあ、なんとかなるかな〜。

身体がばらばらになったりとかしないよね。

ちよつと心配だけど。

でも、人間の居るところに行けるほうが嬉しい。

なんか、さっきの説明で、闇を厭うとか言ってたような気がするんだけど……

クロさんが闇の一部……大丈夫なのかな……

クロさんに聞いてもいいんだけど、なんか怖いからやめておこう。

《ねえ》

「はい？」

思わず敬語。

《ぼくはあなたをなんて呼べばいいの？》

そういえば自分について何にも話していないことに気づく。

「あきら。あきらって呼んで」

《うん、ねえ、あきら》

「はい、なあに？」

《最初に言っておくけど、君とそっくり同じなわけじゃないからね？》

なんだろう、意味深な発言に、私は曖昧に頷いた。

「どういう意味？」

《実際に行ってみないとわかんないよ》

クロさんはすごく楽しそうだ。

「なんで一緒に行ってくれるの？」

クロさんは振り返って私を見上げた。

大きな青の目が少し細められた。

《面白そうだから。それと、ヒトに興味があつた。

君と会って、ぼくに自我ができる前から、闇の一部として世界を見ていたんだ。

他の動物とは違う知性を持った種族の生活に興味を持ってた。

だから、あの日、君が一人で闇の中に放り出された時から気になつてた。

君はヒトとそっくりだから……》

そう言い切ってまた歩き出したクロさんを追う。

そうか、初めてここに来た時から、見ていてくれたのか…

夜の間に感じていた安心感の正体もクロさんだったんだ。

そう考えたら、なんだかうれしくなってきた。

ここにきて初めて心から笑った気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1447z/>

アウト！

2011年12月28日22時47分発行